
桜のつぼみ～あなたが教えてくれたこと～

メイソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜のつぼみ〜あなたが教えてくれたこと〜

【Nコード】

N2525Z

【作者名】

メイソン

【あらすじ】

桜が咲く頃“あなた”と出会った。

“あなた”が教えてくれたこと。

「君が描いた絵は自分で下手だと思いかもしれないけど、世界中の“何人”かはこの絵を見て涙するかもしれないよ。」

その言葉、僕は今でも忘れない。

だから、一生懸命歩いていくよ。

(前書き)

オリジナル作品のため、無断転載・パクリ禁止です。

陽春の候 うららかな季節。

桜が咲き乱れようとする葉桜の季節になるうとしていた。

『僕』は高校3年生になって、

今年から受験生という大事な時期に差し掛かっていた。

受験生と聞くととても重く感じ、何か夢がある訳でもない僕にとっては

ただただ勉強に明け暮れる日々が待っているようで嫌で仕方なかった。

そんなある日……

学校が終わり、今日はなんだか違った帰り道で帰りたくて

学校横の木々が茂った大きな公園の中を帰ることにした。

その“公園”と呼ばれる場所は池に囲まれていて芝生やアスレチックの広場もある。

公園というより、ただの“園”だ。

僕は、その広い公園を思いのまま歩くことにした。

ジャリジャリと足元の小石が音を立てる。

しばらく歩くと木造で出来た小屋風に出来たベンチを僕は発見する。

その小屋は公園の中にくつももあり、多分お花見客や散歩をする人のために造られたものだろう。

その一つの小屋のベンチにキャップを被ってスケッチブックを持ち、絵を描いている人がいた。

それが“お姉さん”との最初の出会い。

僕はこんなところで何を描いているんだろう。くらいにしか思わなくて、その光景を遠くからジッと見つめてしまった。

見られていることに気がついたお姉さんは振り返り、僕に向かって「やつ！」っと手を振り声をかけてきた。

そのお姉さんは僕よりも少し年上くらいに見えて、キャップを被っているせいか女性というよりは男らしい女の人に見える。

僕は年上の人とあまり話したことがなかったから声をかけられたことが恥ずかしくなったけど、何をしているのか興味深々で近づいて聞いてみた。

「お姉さん何描いてるの？」

「桜だよ。ほら」

お姉さんは指を上に向けて指した。

そこには、たくさんの木々に桜の蕾が咲いている。

お姉さんはその木々になった蕾をスケッチしていたのだ。

大きなスケッチブックには鉛筆で描かれた蕾の絵。デッサンというやつだ。

「座りなよ」

お姉さんがそういうので僕はお姉さんと少し距離を開けて隣に座ることにした。

「蕾が開いて満開になったら、もう一度この場所で描くんだ!」

お姉さんはそう言って絵を描きながら自分のことを話し出した。その話を僕は黙って聞いた。

この近くの芸術大学に絵を学ぶために通っていて、絵を描くことが生き甲斐ということを知った。

やりたいことがあって・・・それを学ぶために大学へ行く・・・。僕とは似ても似つかなくて、そのことがどんなに羨ましいと思ったことだろうか。

「絵描いてみる?」

お姉さんは僕にそう言ってスケッチブックの1枚を破り、鉛筆と一緒に渡してくれた。

真面目に絵なんて描いたことがなかった僕は、

「どーせ、上手く描けないよ」そう嘆きながら鉛筆を走らせた。

描き始めてから30分くらい過ぎた頃、

その時には僕は桜の蕾を描くことに真剣になっていた。

お姉さんは僕の描いた絵を覗くように見る。

「やっぱりお姉さんみたいに上手く描けないよ・・・むしろ、下手くそだ。」

落ち込んだ僕にお姉さんが掛けた言葉はとても意外なものだった。

「上手く描こうとしなくていいんだよ。絵も個性だから、自分が描いたものは人と違っていて当たり前！」

お姉さんは話しを続ける。

「君は自分で描いた絵を下手だと思うかもしれないけど、世界中の“何人”かはこの絵を観て涙するかもしれないよ。それに、私は凄く上手だと思うな！」

初めて絵を描いて褒められた事に対して僕は凄く嬉しかった。

でも、お姉さんが言う『世界中の“何人”かはこの絵を観て涙する』と言った意味はどうしても解らなくて……。

それは、自分で見ても僕の絵は上手いとも言えないものだったから。

それから、お姉さんは

「絵はね、迷いながら描くんじゃなくて迷いを捨てて思い切って描いてみれば良い作品になるよ」

そう言っただけでまた絵を描き始めた。

僕も鉛筆を持ち描き始めた。

その日はいい時間になったから僕は帰ることにして、

お姉さんは「またね！」と言ってくれた。

僕はその日からそのベンチ小屋に立ち寄ることが日課になっていった。

僕の絵はお姉さんが一緒に預かってくれていたから、お姉さんとたまたま会った時は描きかけの絵を手に取り途中から描いた。

お姉さんは相変わらず僕の絵を観ても感想は言わなかったけど、「もつと影を付けた方が臨場感が出るよ」とか「その描き方上手いね」とか指摘されたり褒めてくれたりした。

僕は絵を描くことが楽しいとは思わなかったけど、お姉さんと一緒に雰囲気にもまれていることがとても心地よかった。お姉さんはすごく楽しそうに絵を描いていたから、少なくとも僕にはそう見えた。

ある日から突然、お姉さんはベンチ小屋に現れることはなくなった。多分、大学が忙しくなったんだと思う。

僕のもうすぐ描き終わろうとしていた絵もお姉さんが持っていたから絵が描けなくなった僕の心はポツカリ穴が開いたようだった。

桜が満開に咲いた頃、

僕は何の拍子もなく公園を通って帰ってみようとふと思った。

お姉さんがいたベンチを見たけど、やっぱりお姉さんの姿はなくて・

・
・
桜並木だけがサワサワと揺れていた。

ジャリジャリとベンチ小屋の横を通った時に気がついた。

木のベンチの背もたれ部分には、

お姉さんが描いた絵と僕の描きかけの桜の蕾の絵が2枚画鋏で留められていた。

お姉さんが貼っていったんだと僕はすぐに分かった。

不自然に貼られたその絵を観て僕は涙が溢れ出ていた……。

蓄のままの絵と、僕の周りに咲き乱れる桜達はこれからの“僕”を示しているようで
涙はずっと止まらない。

たまたま通った人がこの絵を観てもここまで号泣はしないだろう。

お姉さんが言った言葉の意味が分かった気がしたんだ。

『君は自分で描いた絵を下手だと思うかもしれないけど、世界中の
“何人”かはこの絵を観て涙するかもしれないよ。』

僕はこの先の人生の中、この春の出来事は一生忘れないだろう。
この想いを大切にして僕はこれからも歩いてく。

(後書き)

短編で書いてみました!!

この話は私と友人で美術館へ絵画を観に行った時に友達が言った一言から出来た作品です。

「上手く書こうとしなくていいんだね!!」

多分、人生もそうなんだと思いました。

人間完璧な人なんていないし、誰も上手くななんて生きられない。でも、それが個性であり生き様なんだと思います。

その生き方も人それぞれであり、一人一人の感性も違う。

誰と出会い、何に感動して、どう成長するかは自分次第だと思います。

今回の主人公『僕』と『絵』は例え話として書いてみました。人生もペンのように迷い無く走らせることが出来ればきっと良いものになります。

読んで頂いてありがとうございました。

上手く伝わってくればいいなーと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2525z/>

桜のつぼみ～あなたが教えてくれたこと～

2011年12月8日23時55分発行